

グルジア・アルメニア・コーカサス歴史、文化、文学、言語等研究資料

北川 誠 一

このコレクション入手の経過については述べまい。ある日、丸善書店から電話で、このコレクションが在庫している旨告げられ、数日後に目録のコピーが送られてきたと書くだけで充分だ。ただし、文部省が与えた予算額は書店の売値より低かった。この差額は当時の図書館事務部長と人文学部事務長のお骨折りによって埋められた。このお二方と、共同購入申請者に名前を連ねて頂いた人文学部の同僚には、お礼を申し上げなければならない。

さて、表題とした当コレクション名は、仮のもので、納入業者は商売上の秘密であるという理由で旧所蔵者の氏名をあかさなかつたが、目録を一見して、イギリスのコーカサス学者デイヴィット・マーシャル・レング D. M. Lang 教授の収集物であることが判った。レング教授は、『グルジア人』(テームズ・アンド・ハドソン社、1966年)、『アルメニア—文明のゆりかご』(アレン・アンド・アンウイン社、1982年)等多数の著書がある世界でも指折りのコーカサス史学者である。購入したコレクションは、書籍、ガイドブック、抜き刷り、パンフレット等1,104点を含むが、残念ながら、教授自身が研究論文執筆に利用している最も価値の高い、グルジア史、文学の校訂されたテキストは殆ど入っていない。これらは、コレクション売却の際に抜かれたか(よくある話である)、あるいは、そもそも教授が個人よりは公的に所蔵することを旨としたからであろう。それはそれで結構、教授自身が出版した『大英博物館蔵グルジア語およびその他の文献目録』(1962年)などのカタログが、その全体像を明らかにするからである。收拾された文献にはこのような核になる部分がない

ので、結果的に地域や分野の範囲が広がり、グルジア語テキストよりは、その翻訳を多く含み、研究的、専門的性格よりは、学習的、一般的なものになった。これは、決してこのコレクションの性格を貶めないであろう。もうひとつ面白いのは、教授の研究室の一切適切、新聞の切り抜きから、コンサートのピラ(これとて、地域研究に関係が無い事ではないが)の類までが含まれている。

コレクションの中で最も早く出版された文献は、アルメニア人の独立運動家ジョゼフ・エミンの回顧録 (Josef Emin. The Life and Adventure of Josef Emin, an Armenian, London, 1792) で、彼が英語で執筆し、後に居を構えたイギリスのロンドンから1792年に出版されている。大時代的な大きな活字だが、640ページの大著である。これはロシア併合以前のコーカサスの情勢を知るには不可欠な資料である。また、コレクションの内もっとも新しい文献は、出版年次からみると1983年である。雑誌や継続刊行物もこの年で途絶えている。

ニコライ・マルというスターリンの言語学者として著名な学者であった。彼には、一般言語学とコーカサスの諸言語に関する多数の研究や調査があるが、この内一般言語学に関する著書は、スターリン諸学の没落にも関わらず、20年程以前に再版されている。そのときには、グルジア語に関する研究書はそのままであったが、レング教授のコレクションの中には、彼の著書が3点ある。その内の一つ、『古代グルジア語文法基本表』(サンクト・ペテルブルグ、1905年)は、古典グルジア語の語形変化表で、とても便利である。アルメニア共和国の国立写本研究所(通称マテナグラ

ン)の図書室にマルの著作集が並んでいた。その中にこれを見つけて、複雑なグルジア語の動詞変化を勉強するにはこれしかないと思ったことがあった。その他、グルジア語の入門文法書、ポケット版辞書の類は、何種類も含まれているが、チコバニ主編『グルジア語詳解辞典』全8巻(トビリスイ、1950—64年)は、まさに拾いものであった。

文学関係では、ケケリツェ科学アカデミー会員の著書が数点入っていたのは、嬉しい。また、19世紀末、イアコブ・ゴゲバシュヴィリは国語教育を志し現代的なグルジア語教科書『デダ・エナ(母語)』を出版したが、この様々な版本が入っていたのも、拾いものと呼んでいいだろう。さっき、校訂史料はないと言ったが、カウフチシュヴィリ校訂の『カルトリス・ツホブレバ』全4巻(トビリスイ、1955—73年)が入っていた。これは、日本ならば六国史に相当する重要な年代記で、実は私が一番嬉しかったのは、この史料集があったことだ。

このコレクションは、世界に唯一である(個人コレクションだから当然だが)。

また、日本では、これに匹敵するコーカサス関係の蔵書を誇る図書館はない。確かに、収書内容は散漫の感を免れないが、私自身の集めた文献と合わせると、系統性はかなりしっかりしてくる。たとえば、レング・コレクションでは決定的に弱いアゼルバイジャン、ダゲスタン関係は、これで充分増補できる。勿論これからも補充、増強していくわけだから、日本グルジア学のメッカ弘前大学(というのは、グルジア学の下宮忠雄、グルジア音楽の森田稔両氏はかつてこの大学におられたからである)の名前に相応しい蔵書になって行くはずである。

さて、最後まで読まれて、さっぱり要領を得なかった方は、山内昌之編著『分裂するソ連』(NHKブックス、1990年)、岡崎正孝編著『中東世界』(世界思想社、1992年)の中の拙稿を参照して頂きたい。

(きたがわ・せいいち 人文学部教授)